

近松「冥途の飛脚」の八右衛門について

佐々木 久 春

近松門左衛門の世話浄瑠璃第14作「冥途の飛脚」は正徳元・1711年3月に上演された。作者59歳で円熟期の作品と言えよう。しかし、登場人物や筋の展開の上で問題が多い。その実説は不明だが、浮世草子、歌舞伎、浄瑠璃等に取り上げられている。(注1)中でも「冥途の飛脚」の「封印切り」と「新口村」が有名であるし秀れてもいて、改作され「恋飛脚大和往来」として歌舞伎や浄瑠璃に今日でも頻りに上演されている。近松作と85年後の寛政8・1796年上演の「恋飛脚大和往来」を比較すると、改作が「冥途の飛脚」の問題点を照らし出してくれる。また、敵役の八右衛門を見ると主役の「冥途の飛脚」における動きが判然としてくるようである。以上の視点から「冥途の飛脚」を検討していきたい。

1

近松の「冥途の飛脚」上之巻において、まず八右衛門は使いのものを立てて銀の催促をする人物として登場する。手代の伊兵衛は言う。「八右衛門様が其のやうに理屈臭い口上は有るまい」手代が相手を煽ってその場を逃れる意図が有るにしても、八右衛門の世間での評価がそこに見られる。使いの者の催促ではらちが明かず、本人の登場となる。

八右衛門はそれまで、為替金を十日余り待ったようである。「五日三日は料簡もある」が、日ごろの「心易」さと金の問題は格別だと言う。

しかし、忠兵衛の真意を見てとり、

鬼とも組まん八右衛門ほろりっと涙ぐみ、いひにくいことよういうた、丹波屋の八右衛門ぢゃ料簡して待つてやる、首尾ようせよ、

と言う。その後、忠兵衛の母親にとがめられて鬢水入れを小判がわりに包んだ忠兵衛の窮地を、八右衛門は「ハテ誰ぞと思ふ丹波屋の八右衛門……」と言って救ってやる。

ここに描かれている八右衛門は、俠気の有る男である。養母の妙閑が、「世帯廻り商売ごど何に愚か」も無かった忠兵衛が「此の比はそはそはと何も手に付かぬ」のに疑いを抱いたところを、八右衛門が男気を以て助けた場面である。

この場面が「恋飛脚大和往来」では、設けられていない。いきなり原作「冥途の飛脚」ならば中之巻に当たるところから一編は始まる。「新町揚屋」の場である。

手付けの五十両以後、払いのない忠兵衛に槌屋治右衛門も困って八右衛門からの話をする。梅川は、

今のお話をいやと言われぬ義理なれど、八右衛門さんと忠兵衛さんとは予ねてわたしが身の上を、せり合わしゃんしたなかなれば……

と言う。

この点、「冥途の飛脚」の八右衛門の立場は、八右衛門自身の言によれば違う。

かういへば忠兵衛を憎み猜むやうなれど、ゐずくみぞあの男が身の成る果が可愛い。

真実神に誓ってもいいが心からあの男のことが心配なのだ、と言うのである。

しかし、「冥途の飛脚」で、「清様下なは誰さんぢゃ」と言う梅川の問題に、「イヤ大事ござんせぬ中の島の八様」と朋輩女郎が言うのに対して、梅川は次のような態度をとるのである。

聞くより梅川はっとしてこれこれあのさんには逢ひともない。皆様下りて下さんせ私が二階にゐることを、必ず必ずいふまいぞ。

梅川が、八右衛門に対してこう言うのは、

(1-1) 忠兵衛の、八右衛門からの借金未返済を知っているからか。

(1-2) 恋敵として忠兵衛と張り合っていて、梅川が忠兵衛を好きだからなのか。

(1-3) もともと八右衛門の人柄が嫌いだからなのか。

疑問が残るが、それはしばらくおいておくとして、忠兵衛の「冥途の飛脚」上之巻における八右衛門に対する態度を見よう。

色里に足しげくなったのと雨続きの川止めのせいで、ひとしきり店に催促の人々が立て込んだ後、忠兵衛が帰ってくる。使いの者ではらちが明かぬ、とやってきた八右衛門に忠兵衛は会う。忠兵衛はまず八右衛門を口先で騙そうと持ち上げるが、乗って来ないばかりか腹を立てる。そこで忠兵衛は田舎の客と梅川を張り合って、一時は心中も考えたが、八右衛門に十四日前に届いた金を50両流用した、と事情を打ち明け泣いて詫げる。

八右衛門といふ男を友達に持ちし故と、心の中では朝晩に北に向ひて拝むぞや（中略）此の忠兵衛を人と思へば腹も立つ、犬の命を助けたと思ふて料簡頼み入る。（中略）此の上は盗せうより外はなし。

本人の心情の吐露もある。

嘘に嘘が重って初手の真も虚言となれば、（下略）

男の口からかやうのことはれうものか推量あれ、咽より劔を吐くととも是程には有るまじ。

これを聞いて「鬼とも組まん八右衛門」も「ほろりっと涙ぐみ、いひにくいことよういうた、丹波屋の八右衛門男ぢゃ料簡して待ってやる、首尾ようせよ」と言う。そして前述の如く忠兵衛の母親の手前も八右衛門は取り繕ってくれるのである。

それ故、「冥途の飛脚」中之巻で八右衛門が前述のように忠兵衛を思うがゆえに忠兵衛の事を言うのであれば、その態度は上之巻と中之巻で一貫している。

だが、八右衛門は言うほどに忠兵衛の窮状をいたく突くことになる。それは、

(2-1) 酷く言うほど効果がある。

(2-2) 言い過ぎである。

もし、(2-2) だとすれば、上之巻と中之巻とは一貫性を欠くと言うことになる。(2-1)であるにしては、八右衛門の言葉は酷にすぎないか、という意見もかなり見られる。この問題も先に送って、次に諸家の八右衛門評を見てみよう。

2

坪内逍遥主宰の近松研究会員の一人、水谷不倒は、八右衛門について次のように言う。（注2）

八右衛門は一寸面白き人物なり。義侠といふ事をはき違へ、親切を為るつもりで他には一向悦ばれざる極く割のわるき役廻り、むしろ実世間にては物の調和を破ぶりこそすれ、殆ど用ひ所なき人物なれども、悲劇喜劇共に其の埋伏したる火薬に点火して、地雷を爆裂せしむる

の導火に欠くべからざる性格なり。

この一般的な評価に続いて、中之巻の八右衛門について、大勢の中で忠兵衛の棚下しをしたのは、忠兵衛を戒めるばかりではない、梅川の「あのさんには逢ひともない」と言う言葉が腑に落ちないし、「斯ふ云へば忠兵衛を憎み嫉む様なれど」と言う八右衛門の申し訳が、たいそう不可思議だと言う。そして八右衛門が以前梅川に小当たりして失敗したことがあったのではないかという推量までしている。

同会員の後藤宙外は、以下のように言う。(注3)

性格の上より見ては、主人公の梅川忠兵衛よりも寧ろ八右衛門の方頗る面白き人物なり。

廓の人々が忠兵衛を避けるように八右衛門は「故意に罵言を極め」たが、

任侠を衒ふ気の方寧ろ友愛の情より強きが故に、一旦忠兵衛が己れの意に悖れるより現在それが破滅を招くに至るをも知りながら、挺身之れを救ふ道を講ぜずして、却て激語を放ちて一層彼れが怒を募らしめ、竟に封印切るの止むべからざるに到らしめたり。

と解する。そして「目的を破るべき手段をもて、却て目的を貫くの道とすること人生には常に多し」として、つづいて「特に情に劇せるとき或は智の足らざる者、往々此の患あり」として、ついに「八右衛門の如き最高の適例なり」と断じている。

以上のように、逍遙一派の解釈で八右衛門は、一言で覆えば「軽率なる任侠の徒」と言うことになる。軽率は任侠の徒の属性と考えているようでもある。

一つの見方ではあろうが、それなら次の点はどうであろうか。

(3-1) 「北浜鞆中の島天満の市の側まで、親仁ともいはるゝ八右衛門」(上之巻)というのは、八右衛門自身の言葉であるが、周囲の人々が彼を親分として認めていたせいでもあろう。とすれば、八右衛門の中之巻での発言は、逍遙派の解釈では不統一と言わざるを得ない。

(3-2) 忠兵衛がもはや梅川にのぼせて、商売が手につかない。対照的に元禄期の堅固な商人として八右衛門が描かれている。いざ忠兵衛を許すや、鬢水入れの証文も余裕をもって、ユーモラスにさえこなす。この態度を中之巻の、忠兵衛の所業を暴露する八右衛門と重ね合わせるとき、上述の宙外の「情劇せる」「智の足らざる」者という範囲に包含できるであろうか。

(3-3) 中之巻の内でも憑かれたように忠兵衛の所業を言う八右衛門と、後半の興奮した忠兵衛をたしなめる八右衛門とをどのように重ね合わせることが、できるのか、分裂だとすれば近松の失敗なのか、それとも当時の作劇法に一般的なのか。

これらの問題が残る。これも、後に考察することになる。

その後の諸氏の説を見ていこう。

高野正巳氏は、八右衛門について次のように言う。近松の傑作である、と述べた後「殊に事件を破綻に導く役割としての敵役丹波屋八右衛門は実は俠気ある友達で、主人公忠兵衛はその真意をつひに汲み得なかったところに悲劇が生じたのであって、いつも悪辣な敵役を設けることを以て悲劇構成の常套手段としてある近松の世話物中、特異な存在であるとしなければならない。」と言われるが、前述の矛盾については触れられていない。(注4)

大久保忠国氏も、八右衛門に注目している。(注5)

八右衛門が敵役ではないとした上で、敵役的な性格を示すときにも(中之巻越後屋の場)「決して悪人とはしなかった」とする。「友人忠兵衛の窮境を見かねて、どうにかして救おうとする

侠気ある人物にしている]と言う。養母の手前もとりつくろってやった、忠兵衛の身の破滅と
思い、廓から忠兵衛を遠ざけるため「窮境をわざと暴露したのも、もとより友情から出た処置で
ある」そして「ただそれを忠兵衛に立聞きされたために、不幸な結果を招いてしまった」、「二人
を無理にも離し得ると判断したところにも計算ちがいはあったろう」とする。梅川の「皆島八様
のがお道理ぢゃ」という言葉も傍証とする。

やはり上の見解も、逍遥派について見た(3-3)のような疑問が残る。中之巻の八右衛門の、あ
の激しようはどう考えたらよいのか。

振り返って見れば、江戸寛政の代に辰岡万作らによって改作された「恋飛脚大和往来」は、こ
れまで挙げてきた上之巻と中之巻の不統一の批判であり、いとも簡単に作品を改訂することによっ
て、それをなしている。

それは第一に、前述したとおり「冥途の飛脚」の上之巻をすべてカットしたことである。こう
すれば、もちろん矛盾の前提がなくなる。

第二に、後述のように、重友氏も言われているが、八右衛門を徹底的に敵役にしたことである。
梅川は口説く。

忠兵衛さんが身請けの手付けを打たしゃんしたゆえ、それで田舎の相談も消えて、ヤレ嬉し
やと思ううち（中略）あの意地悪の八右衛門面が、この間から身請けをするとて、毎日のよ
うに来る……

治兵衛と由兵衛の貸し借りに、忠兵衛と八右衛門の関係がからんで、ついに封印切りとなる、
忠兵衛と梅川がおえんの仲立ちで忍び逢う、この辺りも改作なりにつじつまがあう。ともかくも
八右衛門は、終始敵役として忠兵衛の悪口を述べたて、忠兵衛の金を見て驚き、封印を捨てて門
行灯でそれを見て、訴人として走る。

改作の寛政8・1796年当時の芝居の好みを示して、それなりの統一も面白みもあるが、近松門
左衛門の工夫は全く無視されていると言ってよいだろう。

3

重友毅氏は、古典大系本の解説では(注6)、「八右衛門の性格にあいまいなもののあることは
否みがたい。上之巻で「思いやりのあるかれでありながら」、中之巻で「こきおろすところに不
可解なものが感じられる」と言う。

その点について、別の場で次のように詳述している。(注7)

中之巻に現れた八右衛門は「上之巻の場面と同じ日の、しかも時刻がそれほど経っているはず
もないのに、かなり人柄の変ったものになっている」とする。上之巻の「兄貴風」「さばけた態
度」が、中之巻では「野暮ったさ」「安っぽさ」を示す。外で立ち聞く忠兵衛、二階で耳をすま
す梅川がいるとも知らずに、「馴染みとはいえ赤の他人に、それも遊里という派手な場所で暴露
するとは、どういう了見」の八右衛門であろうか、と言う。更に、遊里への出入り差し止めを図
らなければろくなことを仕出かさず友達の顔もつぶす「人でなしとはあれがこと」とまで言う。
「無慈悲なやり方」であり、口実と違って「明らかに忠兵衛の敵方に廻っている」と言う。

以上のように重友氏は、上之巻と中之巻とにおける八右衛門の矛盾を詳細に検討されているが、
その理由を次のように説く。——劇的葛藤、人形活躍のため「封印切り」の場面を設ける、その

罪を犯させるための「強力な働きかけ」、その任務を八右衛門に負わせようとする、とする。

八右衛門の上に課した役割の方に、知らず識らず比重がかかり、早くも上之巻とは矛盾する、この人間変貌を招いたものと思われる。

そして、次のように続ける。

この安敵然とした態度・風貌は、その後次第に強められて、ついには本物の敵役と化し、忠兵衛を刺激して、封印切の罪を犯させることに成功するのである。

遊里での暴露は忠兵衛のため、という度々の八右衛門の注釈も、

いかんせん、その「本意」とこの「暴露」とは、とうてい両立するものとは思えないのである。しかもこれは、予定の封印切を実現するためには、やむを得ないこととされたのであった。

作者も上の不都合・不自然に対して、無自覚・無反省だったわけではなく作為的な筆を弄している、と重友氏は言う。

にもかかわらず、それをあえてしたことは、右に見たように、そこに舞台上の演技を盛上げるべく構えられた、趣向からくる要請があったため、それほどそれは強力に、彼に働きかけるものだったのである。

つまりは、

一方に人物描写における即実性、他方に趣向による劇的感動の盛上がりという、しばしば背反するところの二つの要請、

があった、と言う。作者はそれら二者の調整に当りながら、

しかもその両立が許されないと見るや、趣向の方に優位を与えるほかはなかったのである。

これは劇作上の、いわば劇作家としての制約であったが、それを切り抜ける手段は八右衛門を「表には好意をよそおい、裏には悪意を含む、敵役に仕立て」て上之巻、中之巻を一貫する人物として、また梅川の警戒も自然なものとなる、封印切りも成り立つとみた。

敵役としてならこれでよい訳だが、一つ疑問が残る。中之巻で「悪意を裏につつみながら、表面は善意を押し売りする人物」となる。なぜ作者は、

こうまで強引に、彼を敵役に仕立てることを拒否したのであろうか。

重友氏は、こう疑問を投げかけて、この問題を次のように解する。「曾根崎心中」の九平次は主人公たちの悲運に決定的な役割を果たしたが、筋立ての道具として非現実的な「便宜的・作為的存在」となった。敵役は作者にとって「便利であると同時に警戒を要する存在であった。」

その意味で敵役を設けぬ『重井筒』を制作し得たことは、おそらく彼にとって会心のことであったに相違なく、またそのことは、ここに再び敵役を混えぬ作品の制作を意図せしめたと思われる、

それは「作為をはなれて即実を重んじる、芸術家的意欲のあらわれ」であり、さらに言えば、友人と限らず、親しい者同士が、善意の誤解から確執に及ぶという、実人生にしばしば見られる不幸な人間関係を扱ってみようとする、別の野心も込められていたかと思われる。

というように、卓見を出されている。そしてその作者の意図は、「いずれにせよ、結果が失敗に帰したことは事実であるが」と見ている。

ここでは、先に残してきた(1)の疑問から取り上げて見よう。まず(1-1)~(1-3)の梅川が八右衛門に会いたくなかった理由である。前述水谷のように「以前梅川に小当たりして失敗した」という推測は批評の方法として論外として、梅川は忠兵衛と対照的に八右衛門が性に合わなかったのではないか。あるいは、(1-1)のように借金の事を知っていたのかもしれない。この時期は元禄最盛期の商人の勢い(注8)の名残があったろう。それに西鶴「一代男」冒頭の夢介一派の流れが侠客にあれば、八右衛門の人間像は比較的容易に浮かび上がる。それがあくどい態度になれば九平次のようになる。八右衛門も中之巻・揚屋の場で箒を逆手に二階の下から板敷きを突き鳴らすところは、傍若無人であるが、上之巻の彼のイメージとかけ離れたものではない。この事情は、「恋飛脚大和往来」上演の江戸後期の侠客像とは違うだろう。このような八右衛門は、忠兵衛と対照的であり(1-3)のように梅川の好む人物ではなかったろう。

このように考えれば、(3)で残していた「任侠の徒」の性格も齟齬ないものとなるだろう。それにしても、(3-2)で疑問とした八右衛門の暴露の酷、そして(2)で疑問とした「酷く言うほど効果がある」にしては「言い過ぎ」ではないか、という点はやはり疑問が残る。

重友氏は、一つは劇作上の問題とする。確かにそう理由づけたいが、これはぎりぎりまで控えておきたい。また一つには、『重井筒』にならい敵役を作りたくなかった、更には「善意の誤解から確執に及ぶ」とする。これらの問題を筆者なりに次に考察していきたい。

元禄盛期の名残の勢いをもつ、脂ぎった商人八右衛門は、なんとも割り切れない柔弱なしかし根は人の良い友人忠兵衛に、50両の問題から腹を立てる。忠兵衛の肺腑を衝く真情の吐露に、俠気ある八右衛門は心底同情する。さて遊里に来て、初め八右衛門は忠兵衛の身を思って、忠兵衛を寄せ付けてくれるなど頼む。しかし、語るほどに八右衛門は興奮してくる、そして自分の言葉に酔い加虐的露悪的にさえなって、初めの好意は悪意になってしまう。とびだした忠兵衛に、八右衛門は一気に現実に戻り、醒めて忠兵衛の封印切りを押さえようとするが、もう遅い。

この憑かれたような八右衛門の姿は、この作品だけに現れているわけではない。例えば世話物第5作「堀川波鼓」のお種は孤閨の淋しさと酒から誤りをおかす。酒以前に庭の松の木に「あら嬉しやあれ連合のお帰りぞや」と夫の幻を見る。もちろん謡曲「松風」の幻想も重ね合わせているが、理性を超えた狂的状态を近松は描いている。理非を超えて行動する人物としては「丹波与作待夜の小室節」の三吉、「女殺油地獄」の与兵衛らがいる。時代物でも「出世景清」における阿古屋の「嫉妬の仇」や「同」伊庭十蔵の金の為か、肉親の為かという矛盾など枚挙にいとまない。

さて、この作品では、次のような言葉が印象に強い。忠兵衛は言う。

嘘に嘘が重って初手の真も虚言となれば(上之巻)

また、梅川は言う。

始の嘘も皆誠とかくたゞ恋路には偽もなく誠もなし(中之巻)

近松にとって「誠」「真」「実」は、重要なもので、筆者も機会ある毎に論じてきた。(注9)八右衛門の心の動き揺れも、真実の相対性を超えた真実と見ることはできないだろうか。

あるいは、もう一つ考えを述べておこう。前述の筆者の言と関係は薄くなるが、例えば一日の能の演目のように直接的な筋の連絡はないこと、それゆえ高揚する各段が独立的である。だから、

後世「恋飛脚大和往来」のごとき改作を成立させ、かつ名作として繰り返し上演されている、とも言い得る。プロットの有機的一貫性を求めない日本演劇の特徴とも言えそうである。

(注1) 『御入部伽羅女』(浮世草子、宝永7)、『けいせい九品浄土』(歌舞伎、宝永8)、『傾城三度笠』(紀海音、正徳3)、『けいせい恋飛脚』(菅専助ら、安永2)等。

(注2) 「冥途の飛脚」(『近松之研究』坪内逍遙、網島梁川共編、明治33・春陽堂)

(注3) 注2に同じ

(注4) 『近松門左衛門集、下』(「日本古典全書」昭和27・朝日新聞社)

(注5) 『近松』(「日本古典鑑賞講座、20」昭和32・角川書店)

(注6) 『近松浄瑠璃集、上』(「日本古典文学大系」昭和33・岩波書店)

(注7) 「『冥途の飛脚』の問題点」(『近松の研究』1972・文理書院)

(注8) 大石慎三郎「元禄時代の経済と社会」(『ケンペルのみたトクガワ・ジャパン』1992・六興出版)

(注9) 拙著『近松の文芸』(1999・和泉書院)